

ニホンザル研究 Part2

ニホンザルは本当にヒトと違うのか

—子育てと子どもの成長を追う—

東洋英和女学院中学部 3年

高橋 伶佳

研究を始めた理由

幼い頃から観察場所である被^ひ露^ろ山^{やま}公園^{こうえん}に通い、被露山公園ニホンザルの生活の基盤となる順位制が、野生ニホンザルと大きく異なっていることをつきとめた。その中でずっと疑問に思っていたことがある。ニホンザルの母親は、どうして私たちヒトと同じように子どもを可愛がり、世話や手入れをし、子どもが他の子どもと遊んでいる時は遠くから見ている、という子育てをするのかということだ。そこで今回、子育て、子どもの遊びに焦点を当て、様々な謎を探ることにした。

研究の目的

研究 1：ニホンザルの子どもの遊びに傾向や遊び相手に決まりはあるか。

どの子どもも道具（枝の棒等）を同頻度で使って遊ぶのか。

研究 2：ヒトの子育てはよく「一人目は神経質、二人目以降は大雑把」と言

われるが、ニホンザルの子育てもこのようなのか。

研究の方法

研究 1：月日、時間、遊んでいる個体の名前、何をしているかを記録する。

研究 2：親子の相互交渉が行われている時、月日、時間、親子の名前を記録する。その母親の育児回数と順位、年齢、子どもの年齢を比較する。

研究の結果

研究 1：○遊び相手の傾向

●遊びは同年齢、または連続した年齢間で多い。

○子ども間のゆるやかな順位関係

●子ども間にゆるやかではあるが、遊びの中に順位関係がみられた。

- 遊び合計数の法則
- 年齢が上がるごとに遊び合計数は、〔母親から離れる～2歳〕、〔3歳～4歳〕、〔5歳〕と段階的に減っていく。
- 遊び道具の使用と人形遊び
- 飼育下である被露山公園で、野生でみられる人形遊びを発見した。
- 枝の棒を遊び道具として使用した後、元の場所に戻すという高度な行動がみられた。
- 野生ニホンザルとの比較
- 子ども間で野生と同様の毛づくろい、マウンティングがみられた。

研究 2 : ○未解明な事実の発見

- メスの子どもはどのオスの子どもよりも相互交渉の合計数が多い。
- 親の育児回数によって親子の相互交渉回数は変化するか
- 親子の相互交渉において、母親の育児回数は相互交渉の回数に関わっていた。また、育児回数が少ない程、親子の相互交渉が多くなった。
- 親子の相互交渉の回数は、母親の育児回数と関係はしていたが、その回数の倍数とは関係がなかった。
- 母親の順位と相互交渉の関係について
- 母親の順位は相互交渉に関係していなかった。
- 末子優位原則と相互交渉の関係について
- 末子優位原則は親子の相互交渉に影響を与えているが、その順位の倍数とは関係がなかった。
- 子どもの年齢と相互交渉の関係について
- 子どもの年齢は、親子の相互交渉の回数に一番大きな影響を与えていた。
- 親の性格と相互交渉の関係について
- 親の性格は、親子の相互交渉にあまり影響を与えない。

研究から分かったこと

研究 1 : ○遊び相手の傾向

- オスの子どもは、本能によって年下の子どもより同年齢の子どもと遊ぶ傾向が強い。メスの子どもはオスと違って、本能によって年下の子どもとより多く接し、人形遊びを行う傾向がある。
- 本能による行動は飼育下でも野生でも変わらない。
- 子ども間のゆるやかな順位関係

- 野生ではみられない飼育下特有の現象である。
- 母親の順位は子どものゆるやかな順位に影響を与える。
- 遊び合計数の法則
- 子どもの遊びの回数は年齢区分と一致していた。
- 遊び合計数から、4歳児はまだ子どもである。
- 遊び道具の使用と人形遊び
- 人形遊びは、相手の年齢によって遊び時間は変化しない。しかし、メスの子どもはより年少個体の相手と人形遊びを行おうとした。
- メスの子どもは本能により、他のオスの子どもよりも道具の使用回数が多かった。
- 道具の使用の有無から、5歳児オスは成熟し大人オスの順位制の世界に入り始めている可能性がある。
- 子ども間での毛づくろいの催促行動は形が大人と異なっており、野生ニホンザルと同じ形であった。

研究 2 : ○未解明な事実の発見

- 飼育下では母娘息子間において、息子がアカンボ期～コドモ期の間は末子優位原則は成り立つが、息子がそれ以上成長すると末子優位原則は姉弟兄弟のような順になる（飼育下末子優位原則）。野生ニホンザルにおける末子優位原則とは異なっていた。
- 親の育児回数によって親子の相互交渉回数は変化するか
- 育児経験が多い程子育てが大雑把になり、少ない程神経質になるという、ヒトと同じ子育ての傾向がみられた。
- 親子の相互交渉回数に相違が生じる要因
- 母親の育児回数、母親の順位は、親子の相互交渉回数に影響を与えてはいるが、決定的な影響は与えていない。末子優位原則は影響を与えているが、どれほどの影響を与えているか今回は分からなかった。しかし、現時点では、子どもの年齢が、親子の相互交渉に相違が生じる決定的な要因であるといえる。

まとめ

一頭一頭の個体識別の難しさ、夏は直射日光を浴びる猛暑、家から観察場所まで遠い、そのような状況でここまで研究を進めてきたのは、飼育下の被露山公園ニホンザルの持つ野生的な一面と、一頭一頭の持つ個性的な一面に魅了されたからだ。毎回 3 時間、どれだけ目を離さず詳細に観察・記録し分析できるかによって発見の有無に繋がる、そのやりがいの大きさに強く惹か

れたからともいえる。今回発見できたことは多かったが、まだ未解明なことはそれよりはるかに多い。今回の反省、経験を生かして今後の研究に繋げ、更に詳しい研究を行いたい。



研究 1 人形遊びを行うメスの子ども
3 歳児メスのユリ(後ろ)と 1 歳児オスの
カシュー(前)



研究 1 遊び途中、大人のまねをしてマ
ウンティングをする子ども
3 歳児ユリ(上)と 1 歳児カシュー(下)



研究 2 妹が生まれ母親にかまっ
てもらえない 1 歳児オスのカシュー
飼育下では姉弟の順に母親に
かまわれる (飼育下末子優位原則)。



研究 2 親子が毛づくろいをする様子
毛づくろいをする母親サツキ(右)とさ
れる 3 歳児オスのアーモンド(左)